

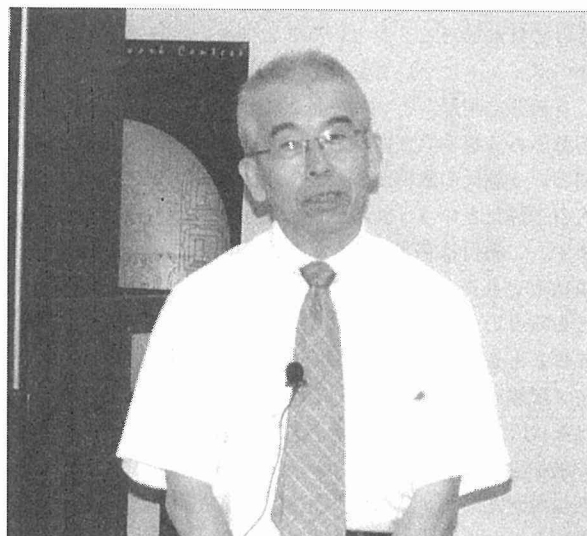
東京会場

中世北方史 —『新羅之記録』を脱構築する—

8月20日（火） 14：00～17：00

講 師

東北大学東北アジア研究センター教授
入間田宣夫



はじめに

今から30年ちょっと前でしょうか。私が学生、大学院生のころは、日本の歴史は京都や鎌倉を中心に議論をする。東北大学であっても、東北のことをやるなんていうと、先生から怒られました。そんなことをやるとまともなものにならないからやめなさい。破門をするという感じで。私なども、はじめの頃は、京都や鎌倉や、日本の中心のほうの勉強をしてきました。

けれども、生まれが東北ですし、少しずつ東北の勉強を始めまして、北のほうから日本の歴史を見つめなおしてみたいと思うようになりました。

京都や鎌倉のほうから日本の歴史をみていると、高いところから見下ろすという感じで、冷たい見方になりますね。それに対して、東北の地元の住民の息が傍で感じられる、そういう立場で京都や鎌倉のことを見つめ直す。そうすると、これまでとは違ったものが見えてくるのではないかという想いでした。

それでも、北海道までは手がつけられなかった。北海道は文字に書かれた史料が少なく、やりづらいんです。東北地方については、若干の史料があり、それを生かすことができるようになってきました。しかし、北海道はもっと少ない。じゃあ、どうするかということで迷っていたのですが、ここ数年の間に、何となく取っ掛かりが見つかったように思います。今日は、その話をいたします。

史料といっても文字に書かれたものだけではない。考古学の発掘現場から、いろいろな情報が出てくるわけです。その考古学の情報ということでいえば、北海道は大いに恵まれている。そのような考古学の成果を取り入れて、数少ない文献の史料を組み合わせる。そうすれば、これまでにないものができるかもしれない。

私は、大学1年と2年のときに考古学をやろうと思って、夏は炎天下の発掘現場にいました。今はベルトコンベアがありますけれども、当時は猫車という一輪車で土を運んで

いたのです。それで、考古学の現場感覚が身についていて、そのあと、考古学と文献史学のドッキングということを試みたときに、その経験が活きましたね。

そういうことで、どうにか取っ掛かりができて、ようやく北海道のことが書けるようになった。津軽海峡を越えて、片足ぐらい踏み出したという感じで、まだまだ本格的な北海道史の研究者といえないのですが、呼んでいただいたので、がんばって努めたいと思っております。

『新羅之記録』という書物があります。これは江戸時代の正保三年（1646年）に、松前藩がつくった歴史の本です。この書物は北海道に関する文字に書かれた史料としては、ほとんど信頼するに足る唯一のまとまった文献ということで昔から有名です。『新北海道史』などにも全文引用してあります。これまでの北海道の歴史は、『新羅之記録』に書いてあることをそのまま信じるか、あるいは少し疑うか。とにかく、それをもとに書いてありました。北海道の歴史は『新羅之記録』がなければ始まらないというふうに言われるぐらいであります。すなわち、高倉先生がおっしゃった有名な言葉なのですけれども、北海道の『記紀』、北海道の夜明けを物語る『古事記』、『日本書紀』に当たるものが、この『新羅之記録』ということになっています。

ところが、権力者がつくるわけですから、自分たちに都合のいいことが書いてあって、都合の悪いことは書いていないわけですね。ですから、『古事記』、『日本書紀』についていえば、津田左右吉を始めとして、大勢の学者が記事をばらして、徹底的に批判して、良いものだけを残して、組み立て直すということをしてきたわけです。北海道の『記紀』といわれる『新羅之記録』についても、脱構築して、良いものだけを残して組み立て直すということをしなければならないのです。しかし、『新羅之記録』を徹底して疑って、組み立て直すということは、まだまだ足りないように思うんです。そこで今回は、それをやってみようということです。その上で、最近どんどん発展している考古学のほうの成果と組み合わせれば、北海道史あるいはアイ

ヌ民族の歴史についても、これまでとは違った見方ができるのではないだろうかということです。今日はそのいくつかのポイントについてお話ししたいと思います。

『新羅之記録』というのは、極端にいうと四つぐらいの特徴のある組み立てになっております。新羅（しんら）三郎という源氏の武将がおりまして、松前藩の先祖は、その人の子孫だという「新羅三郎伝説」が一つの柱になっています。二番目は有名な安東氏にかかわる伝説。三番目は、鎮狄ということです。『新羅之記録』ではアイヌ民族のことを狄というわけです。北のほうに住んでいる後れた異民族のことを狄といいますから、そういう見方で差別し、アイヌ民族を鎮める、やっつける。それが松前藩の、あるいはそれ以前の蠣崎氏からの一貫した歴史的使命であるといって胸を張っているわけです。それから四番目には、落人流入伝説があります。蠣崎の先祖、武田信廣が渡ってくる以前にも、たくさん和人が北海道に渡ってきて、交易に携わっているわけです。かれらはろくでもなかったという伝説なのです。鎌倉幕府に敗れて止むを得ず津軽海峡を渡ってきた平泉の残党であるとか、あるいは京都のほうで山賊・強盗・海賊を働いて流されてきた流人だということですね。ちゃんとした和人が北海道に渡ったのは、蠣崎氏が最初だといって威張っているのです。この話なんか、つい最近まで、そのまま信じられているところがあったりします。

今日、お渡しした『新羅之記録』の抜粋は、『新北海道史』からコピーをしたものです。ここ数年、『新羅之記録』をまゆにつばをして、脱構築をして、考え直そうという風潮が高まっています。

1. 新羅三郎伝説

それでは、皆さんと一緒に読みながら考えていきたいと思います。『新羅之記録』の最初に、松前氏の先祖であります武田信廣の話が出てくるのですけれども、その肩書きがすごくて、「神武天皇正統十五世の孫」ですね。続いて「應神天皇八幡大菩薩正統十八世の孫、人王五十六代惟仁親王清和天皇七代の苗裔」とあって、具体的には「新羅三郎刑部丞常陸守義光朝臣正統十五代の後胤」。それが「当家の元祖信廣朝臣」というわけです。それ以来、「代々の年譜、あるいは名誉奇特の話」というのが『新羅之記録』なのです。

本文を読んでいきますと、「松前当家の元祖鎮狄大将武田彦太郎若狭守新羅氏信廣朝臣は」とくるんですけど、これが問題です。室町時代の1450年代に一介の浪人として、北海道にやってきた武田信廣について、ここではこういう麗々しい肩書きがつくわけです。その特徴ですけど、新羅三郎義光という人物の子孫だといっている。源氏の将軍、八幡太郎義家の弟に新羅三郎義光というのがおりました。滋賀県の三井寺の境内に新羅神社という神社があったんですね。そこにお宮参りをして、成人元服をして、ひとかどの武将になったので、新羅三郎といったのです。その源義光の子孫というのが全国に広がって、常陸の佐竹や、若狭の武田、あるいは甲州の武田というふうに、室町時代に名

門武士として存在していたのです。信廣もその名門の血を引いているんだぞというふうに言いたい。もともと武田と名乗る浪人だったのだけれども、同じ武田の名字だから、若狭の武田氏の生まれということにしたのです。

若狭国守護の武田氏の家に生まれたのだけれども、家を出て北海道までやってきたという話がありますが、嘘ですね。若狭を逃れて、「家の子佐々木三郎兵衛尉源繁綱、郎等工藤九郎左衛門尉祐長」をつれて奥州田名部に来了。そして、近くの蠣崎湊に住み着いたとあります。しかし、佐々木・工藤というのは津軽・糠部方面における北条氏所領の代官の子孫たちでして、若狭から連れてきたというのは考えられない話です。蠣崎を知行していたというのも、危ない話です。あとから蠣崎になるのです。当初は蠣崎とは関係がなかったというふうに考えられる。そうすると、何が信用できるかというと、武田を名乗って、ぶらっとやってきて、北海道の上ノ国町の花沢館の辺りに養われていた。そこには蠣崎修理大夫季繁という人物がいて、その雇われ用心棒みたいな格好で暮らしていたというのが本当だろうと思います。

その蠣崎修理大夫季繁が若狭から亡命して来たというのも全くの嘘です。かれは蠣崎湊を根拠とする地元の武士でした。そして季繁という名前がおもしろい。十三湊安藤氏の家来はみんな季がつく。ですから、名前から言っても、蠣崎季繁はもともと蠣崎湊にいて、この時期には北海道の上ノ国花沢館にいた武士であって、そこに厄介になっていたのが武田信廣ということでもあります。

石井進さんが『中世のかたち』という本を書いておられます。それが大変おもしろい。日本中世の総まとめの本なのです。その本は、全10章のうちの5章が北海道・東北の話になっています。石井さんいわく、日本の中世は、北から出来上がってきたので、北の歴史を知らなければ、日本の中世は理解できないのだということです。その中心になっているのが、北海道の上ノ国の勝山館の話です。学界をリードする石井さんが、全体の半分以上のスペースを当てて、北のほうの歴史が分からなければ、日本の中世の歴史が分からないといってくれたわけですから、影響が大きい。学界の風向きが変わったと思います。

その本で石井さんは、武田という名乗りそのものも危ないかもしれない。あとから若狭の守護と外交関係を結ぶようになってから武田と名乗ったので、蠣崎のほうが最初なのかもしれないと言っているのです。これには反対です。蠣崎があとからというのは明白です。武田の名乗りだけは信じてもいいのではないかとというのが私の立場です。『古事記』や『日本書紀』には、いろいろな人物の名前が出てきて、こういうことをやった、ああいうことをやったということが書いてあるのだけれども、それらをみな疑っていくと、名前だけが残るのです。時代によって名前の特徴があるわけだから、名前をグルーピングして、もとの年代に並べ替えるということが脱構築のテクニクとしてあります。つまり、名前だけは信用する、そのほかはみな疑うというのが、私の立場なんです。

私は武田という名前だけは信じる。しかし、かれが若狭

守護の武田の一族だなんていう話は信じない。佐々木・工藤という人物が家来にいたことも信じる。ただし、かれらが若狭からつれられてきたという話は疑わしい、というふうに読むんです。そして、蠣崎季繁という人物が、上ノ国にいたことも信じる。しかし、かれが若狭から追われて、こっちへ来たという話は信じない。信じることができるのは、武田という名前、あるいは蠣崎という名前、あるいは佐々木・工藤という名前だけだと思います。

若狭守護の武田氏に関係づけ、新羅三郎という源氏の武将の血統を引いているということにして、自分の家の歴史に格好をつける。そのために『新羅之記録』という名前までつけているわけですからね。逆にいえば、そうしないと、蠣崎氏の支配をみんなに受け入れてもらえない。そういうことだったのだと思います。

2. 落人・流人伝説

二番目は落人・流人伝説です。「抑も往古は」、「此国」には、北海道ですけれども、上り下り二十日程の行程で、松前から東側は噴火湾の向こうの鰻川。今の苫小牧の辺りです。あの辺まで。西側は余市。あそこ辺りまで、「人間」が住んでいた。「人間」というのは和人のことです。アイヌは人間でないのです。非常にけしからん話で、人間扱いをしていないんです。

どうやって和人が広がったかという、三つの契機があった。一つは、1189年、頼朝が平泉を攻略したときに、平泉の残党が海峡を越えて逃げてきた。これが最初に北海道に渡った和人。そのときに、なぎなたを櫓槳として、舟を操ってきたというわけです。そのとき以来、北海道の小舟は必ず車櫓といって、なぎなたの形をかたどったものを用いているというふうになっています。そのときに逃げ込んだ和人の子孫は、アイヌ民族と同じような、見分けのつかない格好となって住んでいると書いています。

これが最近に至るまで、定説になっていました。『北海道史』その他に書いています。北海道に和人が渡った最初のきっかけはこれだと。だが、信じられるものではありません。車櫓は秋田県の能代辺りから、北海道、千島、サハリン、オホーツク海、あるいはアリューシャン列島の辺りまで広がっています。北方の諸民族は、大昔から今に至るまで、このようなオール式の手櫓を用いているわけで、平泉の残党が、なぎなたを使ったのがもとになったという話は全然ありえないことです。

二つ目には、同じく鎌倉時代ですけれども、実朝が将軍の時代に、京都の辺りで捕まった強盗や海賊、数十人が捕まって、奥州外之濱、今の青森市の海岸部ですけれども、そこに島流しになり、さらに北海道に渡ってきたという歴史があったわけです。かれの子孫が「渡党」であると記されています。

ところが、「渡党」については、『諏訪大明神絵詞』といって、南北朝時代に作られた本があるのですけれども、別の書き方になっているんですね。北海道の住人には三種類ある。一つは「日ノ本」、一つは「唐子」、一つは「渡党」。

いずれも、アイヌ人と思われる人たちのグループです。「日ノ本」というのは釧路とか、根室とか、道東のほうの住人です。言葉も何も通じないといっているわけです。「唐子」というのは、サハリン経由で中国につながっている、西側のグループです。それに対して、「渡党」というのは、道南にいたグループで、日本語で話せば、少しは通じる人たちだと書いています。すなわち「渡党」を、アイヌ民族の種類と書いています。

それなのに、『新羅之記録』では、京都や鎌倉で捕まって流されてきた人の子孫のことを、「渡党」といっているわけです。そのまま受け止めるわけにはいかない話です。

それから三つ目に、嘉吉三年(1443年)に、津軽十三湊に安藤氏という海の大名がいたわけですが、それが南部氏に追われて、北海道に逃げてきます。「嘉吉三年の冬、下國安東太盛季」が、小泊の柴館を落されて海を渡る。そのあとどんどん人がやってきたというわけです。

したがって、武田信廣が北海道へ渡る以前にいた和人というのは、平泉の落人か、あるいは京都、鎌倉方面からの流人か、さもなければ十三湊安藤氏の落人かというふうに、極端に言えば、ろくな人たちは来ていないといっているのです。これは問題なんですね。実際はそんなことないんですね。

考古学の発掘現場に行って調べてみれば、志苔(しのり)でもそうですし、あるいは余市の大川遺跡でもそうですし、いたるところに和人が住み着いて、アイヌ人と近いところで暮らしていました。そこで昆布を取り、集落をつくり、集落のうえのほうに方形館を構えていました。函館東郊の志苔館が有名です。

道南の辺りには海岸段丘があって、所々に小さい小川が流れ込んでいる。そこをといるんです。大澗というのは、その大きいやつですね。澗には小川が流れ込んで、豊かなプランクトンが生れて、昆布が生えたり、漁場になったりする。その澗を見下ろす方形館ができるのです。

島流しになったとか、戦争に負けて止むを得ず逃げてきたというのではなくて、経済活動、交易をするために、自主的に、日常的に、平和的に、和人が広がってきたわけです。人の名前等からいうと、津軽あるいは糠部に住んでいた、特に北条氏の家来だった、例えば佐々木や工藤という人々が、移住してきたというのが、主流だったようです。

それなのに、逃亡したり、あるいは捕まったりした普通でない和人が主体になって北海道を開拓したみたいな話をこしらえるのは、事実と反するだろうと思います。オーストラリアとか、アメリカ大陸でも、囚人の移住が開発の最初のきっかけだったという言い方があって、北海道史についても、そのようにいわれることが多いんですけど、しかし、これは事実ではないだろう。松前藩の先祖が渡る以前には、和人がいるにはいるのだけれども、ろくなものではない。そういう文脈でいっているわけですからね。ここは疑ったほうがいいと思います。武田氏にとっては、先に住んでいた和人は手ごわいライバルです。ですから、かれらはろくなものではないと言っているんです。それを真に受けてはいけません。

3. ウスケシの和人鍛冶屋によるアイヌ人の殺害

三番目は、非常に有名な記事です。「中比」とあるのは真ん中ぐらいの昔。「内海の宇須岸、夷賊に攻め破られし事」と書いてあって、「内海」というのが問題なのです。狭くとれば函館湾、それから広くとれば津軽海峡という感じです。「宇須岸」というのは函館の古い地名です。アイヌ語に詳しい人の話だと、湾の端のほうという意味です。函館ドックになるあたりですね。島陰ですから、波が来なくて、そこに志苔と同じように土塁で囲まれた箱型の館ができたから、「箱館」なのです。

その「宇須岸」がアイヌ民族に攻められた。その理由というのは、志苔館の近くに鍛冶屋が数百家あって、康正二年（1456年）に、アイヌ人のオツカイが来て、マキリ（釧刀）を打ってもらおうとしたところが、値段をめぐって、あるいは品質のことをめぐって争いになり、和人の鍛冶屋がアイヌ人のオツカイを突き殺した。それでアイヌ人が怒って一斉に蜂起をして、当年の夏から大永五年（1525年）に至るまで、東西数十日程の村々里々を破り、シャモ（和人）を殺すことになった。その結果、生き残った和人は、松前と上ノ国天河という道南の一角に追い詰められて、勢力範囲が狭まったという話になるわけです。

この記事もいろいろな読み方があるのですけれども、和人の鍛冶屋が盛大に営業を営んでいて、そこにアイヌ人の男性がやってくるということです。和人とアイヌ人は経済関係を通して、共存しているわけです。商売ですから、値段をめぐって争いがある、事件が起きることがあるのですけれども、もともと日常的には共存の関係があったということがわかる。このときは、たまたま、これがきっかけになって、アイヌ民族が和人を攻撃する。和人の側は敗れて、半島の一角に追い詰められるということが起きたというわけです。その翌年の長禄元年（1457年）には、有名なコシャマインの蜂起ということになるわけです。

従来の解釈では、和人がアイヌ民族を経済的に追い詰めて困らせるものだから、アイヌ民族が受身の戦いに立ち上がったのだとされてきました。アイヌ民族は経済能力もないし、交易の能力もないという考え方があって、和人の圧迫、アイヌ民族の抵抗という筋書きで、これらの事件を描くということが主流になってきました。和人のほうは経済的に優位で、アイヌ人は受身の立場であったというのは、江戸時代になるとそうなんです。しかし、中世では、わからない。いつでも、和人が優位、アイヌ人が劣位ということができるのかどうか。確かめなければならない。

4. コシャマインの「蜂起」と武田信廣の自立

四番目の史料です。もともと十三湊に安藤氏がいたので、すけれども、それが滅亡します。南部氏という大名にやられて、覇権争いで負けて滅亡する。そこで、南部氏は安藤一族の少年を捕まえて、田名部に置いて傀儡政権にするんですね。それが安東政季（当時は師季）なのです。それが、成長して、田名部から大畑を通して北海道に逃れるんです

ね。独立する。もともと北海道は十三湊安藤氏の領域でありましたし、蠣崎季繁という十三湊安藤氏の有力な家来で、南部氏に追われて北海道の上ノ国のほうにいた人物もありました。そういった人たちが政季を立てて、北海道に独立の旗を立てて、南部氏打倒ののろしをあげる。

ところが、師季（のちに政季）は、同族が秋田にいて、土崎湊とか、あの辺にいますのですけれども、それと連携して秋田に移るんですね。享徳三年（1454年）に師季が道南に南部氏から逃れて、独立の旗を立てるのですけれども、数年後の康正二年（1456年）には、今言えば男鹿半島、「小鹿嶋」に移住して、そちらのほうから十三湊を奪回しようということになるわけです。

そのときに留守居役として道南に仲間を置いていくわけです。北海道の函館方面は、下の国と言ったわけですが、弟の茂別八郎太輔家政に預けて、その副として河野加賀守越知政通を取り立てる。松前方面は同じく安藤一族の山城守定季、その副が相原政胤。上ノ国方面は蠣崎武田若狭守信廣。これは嘘で、実際は副の蠣崎修理大夫季繁が正で、副が信廣なんですけれども。これは逆転しています。みんなが注意していることです。松前藩の記録だから、仕方がないですね。

ところが、長禄元年（1457年）には、コシャマインが蜂起をし、「志濃里」、「箱館」、「中野」、「脇本」、「稔内」、「覃部」ほか、ほとんどの和人の拠点が攻め落とされてしまう。わずかに残ったのが、上ノ国花沢の蠣崎季繁と下ノ国茂別の八郎太輔家政の二人だけです。そのときに、武田信廣が総大将として、「狄の酋長」コシャマイン、「胡奢魔犬」という字は悪いですね。いかにも悪そうに、漢字で書いているので、本人がこう書いているわけではありません。「胡奢魔犬」の親子二人を撃った。

その活躍で、武田信廣は一挙に名前を知られるようになった。そして、蠣崎修理大夫には子供がいなかったために、修理大夫の養女（実は安東師季の息女）を妻として、蠣崎の名跡を継ぐことになった。ここで初めて、信廣は蠣崎を名乗って、実権を自分が掌握する。コシャマインの乱で、だれが一番得したかといえば、信廣ですね。今までは厄介になっていた蠣崎季繁の娘を妻にして家乗っ取った。これは、下克上の最たるものです。

康正二年に安東師季が北海道から主力部隊を率いて秋田へ移ったので、道南の辺りに政治的空白が生じました。そこを見計らって、志苔方面のアイヌ民族が、それに引続いてコシャマインに率いられたアイヌ民族が一挙に勢力の拡大を図ったというのが真相なものでした。南部と、安東師季、それにアイヌ人の首長のコシャマイン、かれらが三つ巴になって争っていたわけです。そのバランスが崩れたときに、アイヌ民族の大攻勢が起きていたということです。南部氏も、安東政季も、あるいはコシャマインも、同等の政治的立場、交易をめぐる縄張り争いに参加している対等の仲間だったということですね。

コシャマインは、そういう政治状況を計算に入れて、主体的な行動をしているわけですから、立派なものだと、私は思います。アイヌ民族は自分自身の利害を考える人では

なくて、縄文時代から、自然と共生していた無欲の人だというふうに考える人がいるかもしれないけれども、それは違います。そのように考えるのは、アイヌ民族を判断に欠けた幼児のような人だと決めつけることになって、かえって失礼に当るのではないのでしょうか。そういう政治的判断ができる立派なリーダーだったと、コシャマインのことを、私は考えます。

コシャマインの乱、あるいはコシャマインの蜂起について一言。何となく悪いイメージですね。受身のイメージですね。コシャマインは独立の集団のリーダーだったのですから、南部氏や安東氏と並ぶ独立の勢力として、堂々と戦っているわけですから、乱や蜂起というのは変で、軍事行動なんですよ。

コシャマインの軍事行動によって、だれが一番得をしたかということ、武田信廣です。武田信廣は蠣崎の家を乗っ取って、上ノ国の須崎に館を構える。やがて勝山館ができる。勝山には、海岸から離れて、山の上に、大勢の家来を住まわして、そこにアイヌ人も一緒に暮らしているような一種独特の住宅団地のようなお城ができます。権力が発展して大きくなったあらわれです。

『新羅之記録』が、コシャマインの軍事行動を大きく取り上げているのは、それを肯定的に評価するためにというわけでは、もちろん、ありません。そこでは、武田信廣によるリーダーシップの確立、延いては松前藩の成立が、コシャマインに代表されるアイヌ民族との対立のなかで準備された。そのことを、強調する。ただ、それだけのために、いわば恰好の適役、悪役として取り上げられたものであったことは、いうまでもありません。

5. 蠣崎氏による松前大館の奪取

五番目の資料です。その50数年後の永正十一年（1514年）、光廣、良廣という、信廣の息子と孫の時代になりまして、上ノ国から松前に小船180艘を仕立てて攻め込んで、松前を乗っ取って、道南の和人のグループを統轄するということに、蠣崎氏は成功します。

こう書いています。「永正十年六月二十七日の早朝、夷狄（アイヌ人）が発向して、武力行動を起こして、松前の大館を攻め落とした。守護の相原彦三郎季胤、家来の村上三河守政儀を殺した。」と。ここでも副将だった相原氏が家を乗っ取って守護になっていたのです。

そして、翌年の3月13日に光廣・良廣の父子が松前に移住したと書いているのですけれども、これが非常に難しい。変なのですよね。前の年にアイヌ人が松前の大館を占領したとなれば、翌年3月に光廣父子が攻め込んできたときにはアイヌ人がいたはずですよ。だけど、そこでアイヌ人と接触したという話は出てこない。これは何だということで、今のところ二説あります。一つは、アイヌ人の首長と蠣崎氏が同盟関係を結んで、松前の城を乗っ取ることに成功したのではないかというものです。研究者の多くが、その説です。もう一つは、下ノ国茂別安東氏と手を組んでいたから、こういうことができたのではないかというものです。

いずれにしても、松前を奪取したからには、檜山屋形安東氏にあいさつに行き、今までは松前の守護家が北海道の代表として認められてきたのだけれども、これからは私を認めてくださいと、お願いをしなければなりません。

そのために、使者を派遣したが、数カ月経っても、戻ってこない。安東氏は怒っているわけです。上ノ国から攻めてきて、アイヌ人と手を結んだかどうかは別として、松前を乗っ取ったわけです。そう簡単に分かったとはならないわけです。

ところが、紺備後という浪人がぶらっとやってきて、非常に口達者なものだから、蠣崎氏の意向を受けて、檜山に上って、うまく話をつけるのです。紺というのは三陸海岸に多い名字で、普通は金と書きます。あるいは今、昆とも書きます。三陸の海民で、古代に朝鮮半島のから移住してきた人たちの子孫です。

すなわち、「諸州より来る商舶旅人をして年棒を出さしめ、過半を檜山に上る。」松前に日本列島の各地から商船が入ってくる。それに対して入港税みたいなものを取るんです。関税ですかね。その収入の半分を檜山に献上するかわりに、蝦夷が島の代表者として、守護として、蠣崎氏を認めてもらうということになりました。しかも、関税を取る責任者には、紺備後を任命するという条件です。これで、ようやく、光廣・良廣父子が、「国内を守護すべき由」のお墨付きをもらうことができたという話です。

6. 蠣崎氏とアイヌ人首長の関税協定

六番目です。天文十九年（1550年）には、檜山屋形の舜季を松前に呼んできて接待をします。それを「東公の嶋渡」といいます。舜季の次男を婿にとることもありました。その前の天文十七年には、若狭の国守護の武田氏と付き合いを始める。

この天文十七年、十九年ぐらいになって、ようやく、若狭、あるいは秋田方面との外交関係が出来上がってきて、若狭守護武田氏の同族であるとか、あるいは檜山安東氏の近い家来だということになった。名前も季廣朝臣になった。蠣崎氏が若狭武田家のなれの果てであるとか、あるいは安東氏の委任によって蝦夷が島を支配したというフィクションが出来上がるのは、この頃でしょうか。

次には、アイヌ民族との間にも、外交折衝が行われます。蠣崎季廣は、いろいろな宝物を用意して、それをどうぞというわけです。アイヌ民族は喜んで、「神位得意」といって、信頼するようになってきた。

その次が大事です。「勢田内」という、上ノ国と小樽の間に貿易の拠点があったのですけれども、そこに有力なアイヌ人の首長がいた。ハシタインです。それから、道南の「志利内」には、チコモタインという首長がいた。その東西の首長のうち、ハシタインを呼び寄せて、「天河」に住まわして、「尹（いん）」に任命した。「尹」というのは首長、リーダーですね。それから「志利内」のチコモタインを、東夷（東部のアイヌ民族）を取りしめる「尹」に任命した。そのうえで、関税の取り分に関する協定を決めた

のです。

諸国から松前の港に入ってくる船に対して、関税を出させる。その集めた関税の半分を、二人のアイヌの首長にくれてやるというのです。これを「夷役」といいます。

さらにおもしろいのは、西のほうから来る、石狩・小樽方面から松前に来るアイヌの船は、必ず上ノ国天河のところで、帆を下げて一礼をする。それに対して噴火湾方面、東のほうから来るアイヌの船は必ず「志利内」で帆を下げて一礼する。これは松前の蠣崎季廣朝臣に対しての礼儀であると書いてある。

これはひどい話で、全くの嘘偽りです。大石直正さんが書いている通りです。中世では、瀬戸内海の高僧が関所をつくって、通りかかる船を見張っています。そこで挨拶をして何がしかのお金を出すとフリーパス。無断で通ると捕まって、身ぐるみはがされるのです。だから、瀬戸内海にもあった日本共通の海の作法であって、「天河人」と「志利内」で帆を下げるということは、二人のアイヌ人の首長が関所を設けていて、沖を通るアイヌ人の船は、挨拶のために帆を下げるということなのでした。松前の蠣崎氏に対して挨拶をするのではなくて、関所を設置している二人の首長に対する挨拶だったのでした。

さらに言えば、「天河」と「志利内」に住まわせて、「尹」に任命したというのも嘘です。もともと、そこに、二人のアイヌ人の首長が関所を構えていて、松前に出かけてくる船を取り仕切っていたわけです。アイヌ人の船に対しては、松前のほうでは、手をつけられない。関税をかけられないわけです。関税を取っているのはアイヌ人の首長のほうです。松前の蠣崎氏ができることは、本州のほうから松前へやってくる船から関税を取って、その半分をアイヌ人の首長へ渡すということだけでした。

交易の主導権は、二人のアイヌ人の首長が持っていて、関所の沖を通る船をストップすれば、松前はいっぺんに干上がってしまうわけです。そういうことをしないでくださいという代わりに、収入の半分を差し出して、どうかお願いしますとっているわけですから、これは圧倒的にアイヌ人側に有利の協定ですね。対等平等なんてものではない。

ところが、江戸時代に出来上がった『新羅之記録』では、そうは書けないものだから、蠣崎氏が二人の首長を「尹」に命じる。しかもアイヌ人の船に、帆を下げさせる。お辞儀を、蠣崎氏に対してしたように書いているわけです。

『新羅之記録』には、アイヌ人の首長を呼び寄せて、一杯飲ませてだまし討ちにした話がたくさん出てくる。蠣崎氏がアイヌ民族と妥協せず、場合によってはだまし討ちなどをしながら、常に敵対してきたという形になっています。鎮狄將軍ということですね。しかし、実際には大事なところで、アイヌ人の首長と手を結び、対等か、対等以下の条件で同盟関係を結んだりして、共存している。

上ノ国の勝山館などでは、イクパスイといって、日本の箸がパスイの語源になるのだけれども、アイヌの使う食器が発掘されている。上ノ国の夷王山では、アイヌ人のお墓が和人の墓の一角にあたりします。勝山館の発掘現場では、チセという家のそばに高床式の倉があって、アイヌ人

が多く居住していたことが想定されます。

アイヌ人と和人というのは平和的に交易していることが圧倒的に多くて、争いもあったでしょうけど、和人がアイヌ人を一方的に傷めつけているという状況ではない。交易というのは利益を共有しながら共存している関係でしょ。当時の北方海域は、交易によってつながっている世界でした。南部氏、大浦（津軽）氏、檜山の安東氏、蠣崎氏、それにアイヌ人の首長らが、利害はそれぞれ違うけれども、共存関係を結んでいたと思います。『北の内海世界』という本で、「内海」という言葉を使って表現しているのは、そのような考え方によるものです。

ところが、織田信長、豊臣秀吉、そして徳川家康が登場することによって、このようなアイヌ人も含めた緩やかな共存関係が壊されます。それによって、アイヌ人が一方的に締め出されるという歴史が起こる。劇的に変わります。これから読んでいきたいと思います。

7. 統一政権の成立とアイヌ民族の締め出し

豊臣秀吉が天下をとって、朝鮮半島に攻め込もうという頃です。「文禄二年正月二日」、1593年です。「肥前州名護屋の御陳（陣）」、これは秀吉が全国の大名を集めて、朝鮮半島へ攻め込むためのベースキャンプで、20万人とか、30万人という町ですね。そこに蠣崎氏が挨拶に行きます。すると、秀吉曰く、これから高麗国、朝鮮を攻めようと思っているときに、「思ひも寄らず狄の千嶋の屋形」、蠣崎氏が挨拶に来たというのは、誠にめでたい。幸先がいいと、喜ぶわけです。それで、蠣崎氏を「志摩守」に任命する。「志摩国」は三重県の志摩国なんですけれども、「志摩」は「島」なんですね。だから、蝦夷が島にも通じるニュアンスがあって、それで「志摩守」なんですね。

そううで、「諸国より松前に来る人が、志摩守」蠣崎氏に断らないで、勝手に夷島に入り込んで、自由に往来して商売をしたりするのはけしからん。志摩守の命令に背いて、アイヌ人に対して理不尽なことをしてはいけないと、秀吉は言っている。秀吉は全国の大名に対して、同じようなことを言っているんですね。民百姓に対して理不尽なことをしてはいけない。民百姓をあまりいじめると税金が取れなくなるので、ひいては秀吉の収入に響くわけですから、民百姓をあまり極端にいじめることがないように言うのです。アイヌ人に対しても同じ気持ちで言っているわけです。

同年3月28日に、蠣崎慶広が帰ったときに、お父さんの季廣が、こう言ったというんです。私の代には若狭国の屋形に書札を通じて、武田氏と一族の付き合いを始めた。さらには「河北檜山の屋形を主君と仰ぐ」、すなわち安東氏の家来となることができた。そうやって、外交関係を整えてきた。ところが、息子のおまえは日本国の大將軍である豊臣秀吉公の家来になった。めでたいと。

次には、秀吉公からもらってきた御朱印を見せるというので、東西のアイヌ人を集める。それをアイヌ語に訳して読み聞かせて、こう言ったというのです。これからは「志

摩守の下知」、蠣崎氏の命令に従いなさい。もし、その命令に違反して、「諸国より往来のシャモ（者某）に対し、夷狄猛悪の儀有るに於いては、速やかに其旨趣を言上せしむ可し」。諸国からやってくる和人に対して、アイヌ人が悪さをしたときには、即刻そのことを通報する。そうすれば、関白秀吉公が数十万の人数を遣わして、アイヌ人を退治するであろう。それを聞いたアイヌ人たちは平伏して、平和になった。それで、商売が安心してできるようになった。国が豊になった。

これはものすごい話でしょ。秀吉の本来の命令と、それを訳したというこの話とは、全く違うでしょ。秀吉のものの命令では、諸国から渡ってきた和人がアイヌ人に対して理不尽の儀を、けしからんことをした場合には、斬るぞと言っているのです。ところが、こっちでは、諸国からやってきた和人に対して、アイヌ人が悪さをしたならば、秀吉が何十万という軍隊を派遣して、アイヌ人をやっつけるから、そう思えと言っています。ものすごい、すり替えですね。

秀吉が蠣崎氏に渡した元の文章が残っています。確かめましょうか。「太閤秀吉公朱印之写」とあって、「松前に於いて、諸方より来たる船頭商人等」が、「夷人、同じく地下人に対して」、すなわちアイヌ人に対して、同じく北海道に渡っている和人の民衆に対して、「非分義」を申し懸けてはいけなと書いてある。そのうえで、「船役之事」、港に入るときの関税なのですけれども、これは昔の通り、蠣崎氏を取りなさい。と書いてある。それ以上ではないんですね。

徳川家康が天下を取ったときにも、同じように命令を出しています。「諸国より松前へ出入之者共」が、「志摩守」蠣崎慶広に断らないで、勝手に「夷仁」アイヌ人と商売してはいけなと言っています。ただし、アイヌ人はどこに行っても商売しても勝手である。例えばアイヌ人の商船が南部のほうへ行って商売をする。津軽海峡を渡ることについては手をつけてはいけなと書いてあります。そのうえで「夷之仁に対して、非分を申懸くる者、堅停止事」とあって、アイヌ人に対して、非分を申しかけるものを、やめさせなさいという命令です。素直に読めば、アイヌ人の従来の権利を保障し、そして和人が勝手なことをするのをチェックをする。そういう主旨の法令です。

ところが、わざわざ東西のアイヌ人を呼び集めて、アイヌ人がけしからんこと、猛悪の儀をした場合には、速やかにその結果を言上し、太閤秀吉に言いつける。日本の中央から何十万という軍隊を派遣してもらって、アイヌ人を皆殺しにするぞと言っているわけです。これは大変なベテンですね。今まではアイヌ人の首長に対して、和人の船から取り上げた関税の半分はどうぞと渡していたわけでしょう。それで平和的に共存していたわけでしょう。それが、このように居丈高な態度に変わったわけです。これが歴史の変わり目なのだと思います。これまでは、村井章介『海から見た戦国日本―列島史から世界史へ―』（ちくま新書、1997年）によって注意されてただけですが、これは大変な変化だと、私は思うのです。

蠣崎氏だけが良い子になる。秀吉のお墨付きをもらって、しかも、お墨付きだって、蠣崎氏に特別の権利を保障しているわけではなくて、従来の権利を保障しているだけなのだけれども、それを利用して、私のうしろには秀吉がいる。今までとはまるっきり違うよというわけです。虎の威を借りきつねというわけです。よその権威を借りて、今までは対等平等に付き合ってきた人たちを下に降ろして、リーダーシップを握るという、すごいことをここでやっているわけです。これは大変です。

蠣崎氏だけではないのです。南部氏もそうなのです。南部の勢力は、一戸、三戸、四戸、七戸、八戸、九戸ほか、いろいろな家があって、横並びの一族連合によって支えられていたのです。ところが、豊臣秀吉の政権ができると、南部一族の中でも、三戸の南部氏だけが挨拶に行き、お墨付きをもらってくるのです。今までは談合して、やってきたわけです。当時は談合という言葉は良い言葉だったのです。三戸の南部氏だけが偉くなるものだから、みんなはおもしろくないわけです。そこで、九戸政実が三戸南部に対して猛烈に抵抗して、戦争になるわけです。そうすると、秀吉は日本全国の軍勢を動員して、九戸城を攻め落すんですね。

今までの日本は、いくつもの勢力が連携して、談合しながら、地域をつくってきているわけです。なかでも、津軽海峡を挟んだ地域には、和人の大名にアイヌ人の首長が交わり、さらには、一向宗、真宗の教団。浄土真宗ですね。あの教団が一大勢力をつくっていて、多極的な「国際関係」ができています。その世界が続いたら、おもしろかったんだろうなと思います。

それなのに、特定の人物に権力を集中して、タテ型の人間関係に変えていこうというのですから、大変です。その結果、被害を受けて、つらい立場に陥った人がたくさん生まれました。なかでも、大きな被害を受けたのがアイヌ人です。

むすびにかえて

ただし、そうであっても、アイヌ人の主体性が簡単に失われてしまったというわけではない。アイヌ人は、「自分」というんですけど、自分なりの稼ぎを守って、がんばっている。アイヌ人の暮らしが根こそぎ否定されるのは、近代の明治国家になってからのことです。

最初から、アイヌ民族は弱者で、被害者で、かわいそうな人たちと思うのは、近代国家の枠組みに捉えられた日本人の思い上がりかもしれませんね。中世までは、我々が想像する以上に主体的な活動を繰り広げていた人たちだったのです。それなのに、縄文時代以来、狩猟とか、漁労に携わってきて、常に和人に被害を与えられて、有効な抵抗ができなかったというように考えるのは、間違っているし、失礼ではないかと思います。

和人を向こうに回して、何人もの首長が現れ、盛大な交易活動を繰り広げていた。アイヌ人はパワーに満ち溢れた主体的な人間集団であった。かれらは、和人との間に、話

し合いをつけて、共生していたのです。そのことが大事です。『新羅之記録』では、意図的に、その部分を落として、蠣崎氏は、始めからアイヌに敵対し、アイヌを追い払うことを目的としてきたと書いてある。そういう虚構を取り払っていけば、そして考古学の発掘成果に学んでいけば、和人とアイヌ人が、交易をしながら、自然体で肩を寄せ合って暮らしているという当たり前の姿が見えてくるのではないかなと思います。

20世紀の歴史学は国家を中心にして組み立てられてきました。たまたま国家をつくることができた、優位に立つことができた民族を中心として、組み立てられてきました。しかも、国家の中心である京都や鎌倉からの視線によって組み立てられてきました。21世紀には、それでは通用しないだろうと思います。これからは、目線を変えて、人びとの暮らしの現場から観察することが求められます。それが人として大事なのではないかと、私は思います。どうもご清聴ありがとうございました。

質 問：征夷大將軍はアイヌ人と戦うためと聞いたことがあるんですけど、その時代から、アイヌの人たちがいたということですか？

入間田：古代に、現在の宮城県の北部から岩手県、北上川流域の住人をやっつけるために任命されたのが征夷大將軍です。その相手は、エミシです。エミシとアイヌがどう違うかというのは非常に難しい議論があります。エミシというのは宮城県、岩手県、青森県辺りに住んでいた人たちであって、日本人とも、アイヌとも割り切れないような人たち。それがやがて日本国の中に組み込まれていって、大部分が日本人になるのだけれども、北のほうの青森県辺りからの人たちは、ある時期まではエゾと呼ばれ、12世紀の辺りから日本化される。それにたいして、北海道にいた住民はエゾと呼ばれたまま、アイヌ文化をつくっていったというわけです。エミシとエゾとアイヌというのは少し段階が違う。そういうことかなとなっております。

質 問：だんだん混血していったんですよね、最終的に。

入間田：東北地方のマタギの言葉には、セタ（犬）とか、ナメ（槍）とか、マキリ（小刀）とか、アイヌ語と共通する言葉があります。東北地方の地名にも、アイヌ語の地名があります。アイヌ語というよりも、アイヌ語ができるもとの古い言語で、あとで日本人になった人たちも、アイヌの先祖も共通して使っていたような言葉があったのじゃないかな。なかなか難しい問題です。

征夷大將軍の夷という文字と、アイヌは直接にイコールではない。時期が違うということです。

質 問：今の質問の関連です。先生は基本的には中世の蝦夷＝アイヌというふうにお考えだとお話を伺って解釈したのですが、例えば、「渡党」、「唐子」、「日ノ本」というのも全部アイヌとお考えなのではないですか？「渡党」はアイヌ

だという根拠がありましたらお答え願います。

入間田：さっきお話したように、『諏訪大明神絵詞』には、蝦夷に三種類あって、「日ノ本」、「唐子」、「渡党」。それに対して『新羅之記録』では悪いことをして流された人が渡党だといっているわけです。『新羅之記録』を信じれば、渡党は和人。だけど、それは危ないだろうと思います。

質 問：蝦夷というのは民族というか、人種というふうにいえるのでしょうか？

入間田：人種や民族というのは難しいですね。11世紀には、今の青森県から、北海道辺りに住んでいる人を、日本国家の側は、蝦夷といっているわけです。かれらの中には、あとから和人になった人もいりし、北海道で擦文文化をつくった大多数の人もいるわけです。ただし、擦文文化はアイヌ文化になっていないところもあるから、12世紀、13世紀あたりの文化を、アイヌ文化といっているいは、学界で意見が分かれています。ただ、13世紀、14世紀になると、アイヌ文化のものが出来上がっているみたいなので、それからはアイヌ文化と。厳密に言って、江戸時代にならないとアイヌの本当の姿ができてこないから、そこから言うべきだという人もいます。このように民族の文化は変わるわけです。それが大事なのです。江戸時代のある時期から知られているアイヌの暮らしぶりが縄文時代と変わらないという、とたんに間違っていることなんだと思います。つまり変わるのです。

質 問：和人とアイヌの人口比率がどうなっているか、何か情報がありますか？

入間田：近代になると圧倒的に和人のほうが人口が多くなりますね。だから江戸時代のある時期から移住者が増えてきて、そういう現象が起きると思うんです。中世の段階では、アイヌ人が数においても優位に立っていたから、和人の勢力を道南の一角に追い詰めるということが起きているんだと思います。具体的なことは、これから考えてみたいと思います。人が移住するという問題を、戦後の歴史学はあまり得意としてこなかったのです。戦前には、人の移住というと植民地の話とか、そういうふうになってしまいました。戦後には、その反省から、移住という言葉がタブーにした。しかし、今では、新しい視点で、もう一度、人の移動の問題を取り上げなくてはならないと、私は思っております。